

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：33801

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21560677

研究課題名（和文）近代日本住宅史における「田舎」への志向に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the intention to the "countryside"
in the history of modern Japanese houses

研究代表者

土屋 和男（TSUCHIYA KAZUO）

常葉大学・造形学部・准教授

研究者番号：60333259

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代日本住宅史において近代数寄者の建設した「田舎家」を主に取り上げ、次の3点を行った。①その所在および建築物のリスト化、②益田鈍翁小田原別邸・掃雲台の敷地、建築物、景観の復元的考察、③「田舎家」の位置付けを通じた、近代における「田舎」への志向およびその系譜の解明。特に②は「田舎」への志向を示した代表的な事例であり、地形と土地利用の関係や茶室の変遷を明らかにし、模型を製作した。

研究成果の概要（英文）：This study mainly took up the "Inakaya" (country cottage) which Kindai-Sukisha (a master of the tea ceremony in modern age) built in the history of modern Japanese houses and performed the following three points. 1) The listing of the whereabouts and a building. 2) The historical study of the Masuda Donno's villa at Odawara that named Soundai : the land, architecture, landscape. 3) The study of the intention to the "countryside" in modernization through positioning of the "Inakaya". By research of 2), the relation between geographical feature and land use and changes of some teahouses were clarified, and the maquette was made.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学、建築史・意匠

キーワード：近代和風、田舎家、益田鈍翁、仰木魯堂

1. 研究開始当初の背景

本研究は研究代表者が近年取り組んできた、近代数寄者による和風住宅の形成とその背景となる美意識に関する研究から着想したものである。近代数寄者とは、明治中期から昭和初期にかけて存在した、茶の湯を趣味

とする富裕層である。現代に連なる大企業の礎を築いた実業家を中心に、明治維新の功勞者、旧大名家の当主、医者、学者、地方の旧家・素封家、茶宗匠、数寄屋大工、道具商などから構成され、強力な財力によって茶道具の蒐集と住宅・茶室の建設、作庭を行った。

近代数寄者が建設した建築物は、近代和風住宅史において重要な一角を占める。これに関しては、既に多くの研究成果があるが、研究代表者は、熊倉功夫氏らによって近年、新装版の刊行が行われた高橋箒庵の茶会記録を用いて研究に取り組んできた（土屋和男「近代数寄者の茶会記録に見られる和風住宅の敷地の変遷および場所性に関する研究」平成17,18年度科学研究費補助金（若手研究B：課題番号17760522））。高橋箒庵の記録を参照した、近代数寄者の住宅とその立地に関する研究では、鈴木博之氏による一連の近代和風と場所性の関連に関する著作等がある。

上記の研究を進める過程で、特に近代数寄者によって好んでつくられた建築物として、「田舎家」に着目するに至った。「田舎家」は特に大正から昭和初期にかけてつくられたもので、古い民家を移築し、手を加え、茶室や客間として改修したものである。理想的な「田舎家」となる民家は、かつて庄屋を務めたような大規模な旧家で、これを地方から探し出し、都市郊外や別荘地に移したのであった。「田舎家」は郊外や別荘地という敷地としても、移築を可能にする移手段としても、その成立には近代化が不可欠な建築であった。一方、その姿は一般的な近代の印象とはうらはらに、前近代の農村を思わせるものであった。その姿が示すのは、自然への志向であり、そうした志向が財力と教養を備えた者のよき趣味であることであった。このように「田舎家」を可能にしているインフラと、「田舎家」が表象している志向や趣味とは一見背反しているかのように見える。しかし、その二面性こそが近代において和風あるいは民家を考えることの意義を示しており、その意義は現代でもなお有効であると思われる。

「田舎家」の建設をリードした建築主は、益田孝（鈍翁）や団琢磨（狸山）らである。そして、彼らの構想を建築的に実現したのが仰木敬一郎（魯堂）であった。「田舎家」および仰木魯堂に関する建築的な研究としては、藤井喜三郎氏による記録、中村昌生氏による論考が重要である。伊藤ていじ、横山正の二氏、初田亨、大川三雄、藤谷陽悦の三氏にも論考がある。また、水沼淑子、小沢朝江の二氏や矢ヶ崎善太郎氏の研究が、同地域、同時代を扱ったものとして参考になる。また、建築主に関しては近代数寄者の伝記等が資料となるほか、益田孝の住宅形成について鈴木邦夫氏の経済学的調査がある。

しかしながら、既往の研究はいずれも「田舎家」を主題として扱ったものではなく、「田舎家」がどこに、どれだけ、どのような姿で存在したかという、ひとつの建築のタイプとしての「田舎家」の全体像は明らかになっていない。さらに、「田舎家」を研究すること

は、同時代の「非都市的なもの」（掘口捨巳）や民藝（柳宗悦）との関係を明らかにし、和辻哲郎や白州正子らを通して現代にまでつながる「よき趣味」としての「田舎」への志向を明らかにすることにつながる。

2. 研究の目的

(1) 「田舎家」の所在および建築物のリスト化、仰木魯堂の手になる建築物のリスト化

近代数寄者の茶会記録を基礎として、「田舎家」の所在をリスト化する。この際、「田舎家」とは、どのような姿であったかに着目したい。また、近代数寄者の「田舎家」実現に建築技術的に大きな役割を果たした仰木魯堂の作品リストもあわせて製作する。

(2) 「田舎」への志向を示した代表的な事例として、益田鈍翁小田原別邸・掃雲台の敷地、建築物、景観の復元的考察

益田鈍翁小田原別邸・掃雲台は広大な敷地のなかに各種の建物が点在していた。地形、土地利用、建築物の配置、形状、庭園、農園等の敷地内景観、眺望等の復元的な考察を行う。

(3) 「田舎家」の位置付けを通じた、近代における「田舎」への志向およびその系譜の解明

従来、近代住宅史研究は都市住宅および郊外住宅地の形成に主に目が向けられてきた。一方、民家は民俗的な建築物として扱われ、この二者にはほとんど接点が見られない。近代住宅としての「田舎家」は近代和風住宅の一樣態として建築史上に取り上げられてはいるものの、建築家の設計によらず、また新築でもないために、これを主題にした研究は行われていない。「田舎家」は新築ではないが、近代の一時期に明確な美意識によって「発見」された建築のタイプである。こうした住宅の研究は、都市住宅が主流のなかにあっては緊急性が低いと見られていたが、現代において環境意識とともに高まってきた「田舎」への志向へ歴史的資料を提供するものである。「田舎」への志向が明らかになることは、今後の郊外や地方における住宅像を考える上で意義あることである。

3. 研究の方法

(1) 高橋箒庵、野崎幻庵による茶会記録を中心とした文献資料から、近代数寄者の「田舎家」および仰木魯堂の作品に関する記述を拾い出し、その情報に基づいて現地踏査を行う。あわせて現地での郷土資料の発掘も行い、建築主の伝記的資料等によっても補足を行う。また、同時代性や用途、様式等の観点から、関連・参考遺構の現地調査を行うとともに、近代数寄者の遺物を収蔵する博物館等で関

連資料を閲覧する。

(2) 益田家小田原別邸の執事をつとめていた人物の子孫が保有する、敷地内の建築確認申請に使われた配置図の分析を中心に、掃雲台について記した文献資料との照合、現況地形図との照合等を行い、失われた建築物や景観を推測する。これらの進行に合わせて、現地踏査、関係者へのヒアリング、益田鈍翁関連・参考遺構の現地調査、博物館等での資料閲覧等を進める。さらに模型を製作し、敷地景観を復元的に提示する。

(3) 「田舎家」が影響を受けた思想としては、①アーツ・アンド・クラフツなど近代デザイン運動と田園趣味、②前近代からの美意識である隠棲や草庵茶室に見られる閑寂な風趣、等が考えられる。これらに関連する文献調査、現地調査および研究者からの聴取を行う。建築史に限らず、庭園史、文化史、哲学等の周辺領域を含み、場合に応じて複数人の討論とする。

4. 研究成果

(1) 「田舎家」の所在および建築物のリスト化、仰木魯堂の手になる建築物のリスト化

①平成 21 年度には、高橋箒庵による茶会記録に基づき、さらに同時代の文献もあわせて参照しながら、「田舎家」に関する暫定リストを作成するとともに、論考を発表した。ここでは「田舎家」を「価値付けられた民家」ととらえ、「価値付けられた景観」としての「風景」と類比することによって、「田舎家」の意味を考えた。この場合、「田舎家」と「風景」はともに、既に存在したものに、新たな文化的視線が作用して、価値が付与されたものである。「田舎家」は「価値付けられた民家」であるが、近代数寄者たちは「民家」とは呼んでいない。「民家」という語が現代に通じる意味で使われはじめた大正期の、民俗学的な視線からの研究の開始と、近代数寄者らによる「田舎家」への関心とが、同時代に発生していることは注目に値する。

②平成 22 年度には、高橋箒庵による『昭和茶道期』の茶会記録に基づいて作成したリストを、既に集計済みであった『東都茶会記』、『大正茶道記』のデータと比較しつつ発表した。本研究と関連の深い別荘での茶会等の件数に関しては、次のような結果が得られた。1) 昭和初期に別荘地での茶会等が増加している。2) 東京圏の別荘地のうち、海浜別荘地では小田原の益田鈍翁別邸・掃雲台が多数を占めている。近代数寄者の代表的存在であった益田鈍翁の本拠地が東京から小田原に移ったことが茶会等の開催場所に影響している。3) 東京圏の別荘地のうち、高原別荘地では軽井沢の益田多喜別邸が多数を占めてお

り、これも鈍翁の影響と見ることができる。別荘地における茶会等は鈍翁がリードしたと見てよい。この結果は次項(2)を補完するものとなった。

③平成 24 年度には、本研究の最終年度における「田舎家」の位置付けとして、「田舎家」に関するこれまでの調査を踏まえ、近代数寄者による茶会記録等における「田舎家」を再度チェックし、彼らがいつごろから、どのようなものを「田舎家」と見なし、それらにどのような可能性を見ていたのかを考察した。近代数寄者の「田舎家」は明治 20 年代に副次的な茶席からはじまり、大正後期には民家を移築したものが主流になる。このころになると美的にも従来の茶室と異なる評価が定着してくる。「田舎家」の系譜のなかで通底するのは、新しい茶席の様式を、近代数寄者自身が探し、つくるという点であり、建築家による新築の建物を中心とする近代建築史に対して、別のあり方を示している。最終的に日本建築学会論文集で発表し、これは「田舎家」を主題として扱った初めての学会論文となった。

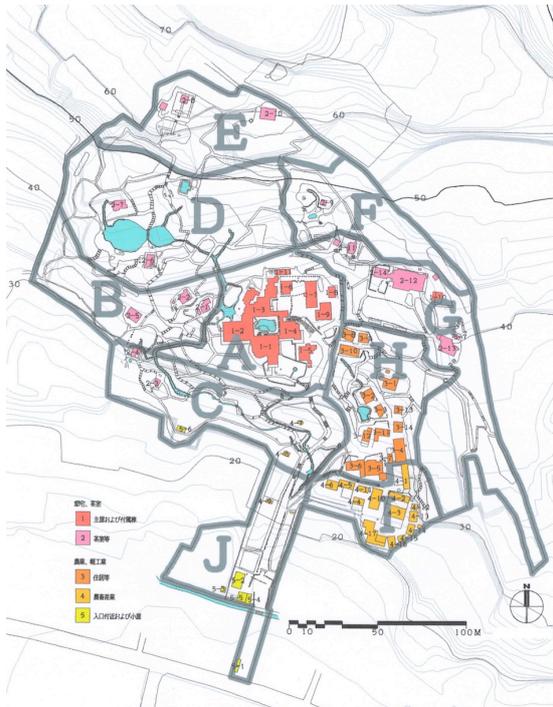
④上記③と並行して、仰木魯堂の建築作品についても再度チェックを行った。魯堂の仕事は、その初期には文人趣味が見られるなど、「田舎家」に至るまでに曲折が見られる。作品のリスト化という当初の目標は果たしたが、今後の課題として詳しい事跡の解明を行いたい。

(2) 「田舎」への志向を示した代表的な事例として、益田鈍翁小田原別邸・掃雲台の敷地、建築物、景観の復元的考察

①全期間を通じて、現地調査と資料の読込を進め、資料間の比較、異同の考察、地図、図面と実際の敷地との比較等を行った。敷地内は邸宅・茶室と農業・軽工業のゾーンに大別できる。前者では敷地内ほぼ中央の主屋を中心に、庭内に数多くの茶室が点在していた。後者は鶏舎、従業員宿舎などからなり、農園と工場が経営されていた。あわせて 60 棟以上の建物があり、地形に応じて水路、土地利用が密接に関連していた。

②特に平成 23 年度には、庭内に点在していた茶室について、その来歴や変遷の検討、照合を行い、あわせてこれらの図版資料の整理、検討を行った。この考察によって、例えば「為楽庵」、「幽月亭」、「蝸殻庵」等について、錯綜した伝承や記録を整理できたと考えるが、逆に不明な点も明らかになった。

③平成 24 年度には、地形および建造物の配置図と推測立面図を描き起こし、1/500 の模型作製を試みた。この過程において、邸内の地形と土地利用の関係や農業・軽工業の様子が明らかになった。また、益田鈍翁の他の邸宅との関連性を考察し、小田原別邸の位置付



益田鈍翁小田原別邸・掃雲台の土地利用
地形と用途が対応し領域分けされている〔雑誌論文③〕



益田鈍翁小田原別邸・掃雲台の模型
地形に応じて建物が配され、水路が巡る〔雑誌論文③〕



益田鈍翁小田原別邸・掃雲台内の「田舎家」：観瀉荘
昭和4年、名古屋地方から移築〔雑誌論文①④〕
〔『大茶人益田鈍翁』学芸書院、1939 収載〕

けを行った。

④以上の成果は、平成 24 年度に小田原市郷土資料館分館松永記念館での模型の展示ならびに「掃雲台 失われた壮大な邸園」と題する招待講演（主催：板橋秋の交流会実行委員会（小田原市等で組織））によって広く公開された。また成果は3カ年にわたって継続的に発表後、これを再編、修正し、報告書として刊行した。

⑤本項についてまとめると次のようになる。益田鈍翁小田原別邸・掃雲台は、近代数寄者の邸宅の代表的事例であったといえる。近代数寄者は、日本の近代化を進めたリーダーであり、益田孝がその筆頭格であったことは疑いがなく、掃雲台は、単なる金持ちの別荘と片付けるには、あまりにも壮大な構想と実験的な試みに満ちていた。

掃雲台の形成過程は常に動きの中にあり、全体においては一般的な意味での竣工が確定できない。建物が次々と新築されていくのみならず、邸宅・茶室ゾーンにおいては、茶室と門を個別に移設したり、さらに他の本邸、別邸との間での移築も行われていた。多くの茶室は茶題によって使い分け、「田舎家」のような実験的、独創的な試みは、近代に得た「田舎」における自由の形象化といえる。また、農業、軽工業ゾーンでは事業の変化にともない頻繁に変化があったと思われる。関東大震災に際しても、鈍翁は名古屋に1年間避難したものの、掃雲台の再整備を進め、実に90歳で生涯を閉じる昭和13（1938）年までここを本拠とし続けた。全体としていけば日本版カントリー・ハウスを実現したもので、掃雲台は近代日本住宅史における富裕層の「田舎」への志向を示した代表的な事例と目される。

そこは益田孝という実業家であり、鈍翁という近代数寄者であるその人が、本当にやりたかったこと、つくりたかったものを、自分自身で実現していった壮大な実験場であった。近代和風住宅においては、しばしば前近代の支配階級の形式や材料を模倣する例が見られるが、そこでは家作や物流において近代化が前近代の憧れを実現させるツールとしてはたらいっている。近代化を進めたリーダーたちの、こうした自己実現の楽しみが、近代化成功の陰の要因ではないかと思えるほど、その憧れと近代化は密接に関連している。実業家と数寄者という一見関係のない顔が、ここにおいてピタリと重なる。掃雲台は、益田鈍翁という人の夢を、近代化の進行とともに実現しえた、奇跡的に幸福な世界であった。

(3)「田舎家」の位置付けを通した、近代における「田舎」への志向およびその系譜の解明

①平成 21 年度に、当初の予定になかったこ

ととして、三菱グループ総理事であった木村久寿弥太が建設したと見られる伊豆河津の別邸を調査する機会を得て、これを本研究の一部に組み入れた。この別荘が建てられた昭和初期には、近代数寄者の間では「田舎家」が流行していたが、同時に洋風と和風を違和感なく融合した別荘も好んで建てられた。当該建築物に見られる山荘風の外観等はこうした傾向を示している。その立地や形状から見ても、当時における富裕層の「田舎」への志向の表現として興味深く、狭義の「田舎家」とは姿が異なるが、本研究においてはこうした姿のものも射程に含む必要性を認識した。それは表現において、カントリー・コテージ等の海外からの影響を示す一方、特に昭和期になって、民藝やモダニズムが勃興し始めた時期の「田舎」への志向を示す事例でもある。附記すれば、この調査に基づき、当該建築物は平成 22 年度に登録有形文化財としての答申を得た。

②平成 22 年度に、やはり狭義の「田舎家」とは姿が異なるものではあるが、近代富裕層の「田舎」への志向を表すものとして、大倉和親（日本陶器社長等）が興津に建設した別邸の実測調査を実施した。さらに平成 24 年度には、興津から博物館明治村に移築された、西園寺公望別邸・坐漁荘の修復工事現場を見る機会を得るとともに、現場担当者と意見交換を行い、新知見を得た。これらは従前から代表研究者が手がけていた興津における別荘形成史を踏まえたもので、単体の建築物を超えて、興津という場所としての「田舎」を考察するものである。

③他方、前近代からの茶室としての「田舎家」の系譜をまとめ、あわせて茶文化における概念から見た「田舎家」のデザイン論を発表した。これには科研費を用いていないが、本研究に密接に関連するものであるので、附記しておく。

④平成 23 年度に、建築史を基盤としつつ、周辺領域の研究者との意見交換を公開研究会として実施した。パネリストとして水沼淑子氏（関東学院大学人間環境学部教授・住居学）、堀田典裕氏（名古屋大学大学院環境学研究科助教・環境デザイン）、栗野隆氏（東京農業大学地域環境科学部助教・造園学）の 3 名を招聘した。

ここでは各氏から近代における「田舎」への志向を表現した事例が報告されるとともに、「田舎」の価値は、田舎からは見出されないという定説に触れるものとなった。すなわち、「田舎」を享受するという感覚は、基本的に都市の論理に基づくということである。もともと、近代の富裕層たちが「田舎」を志向したとき、それは自分たちが進めた近代化によってもたらされた、都市の環境悪化や規制から逃れるためであった。そして、「田

舎」の価値が確立した場所では、投機的な土地取引の動きが現れる。人々の憧れの場所では、より高密度に、より高層に土地を開発すれば、多くの利益を生むからである。一方で、「田舎」の価値を存続させようとするれば、開発は抑えられることが望ましい。開発の論理を許せば、結局は「田舎」の価値は減じてしまう。ここに「田舎」の論理的矛盾がある。すなわちそれは、都市の論理を基盤としながら、同時にそれを否定する宿命を内包している。この矛盾に向き合うことが、「田舎」を考えることの意義でもある。

この公開研究会では、会場のアーティストから、「田舎」のよさは何といても都市ではできないことがやれる自由だ、という意見があった。都市ではルールという名の規制が覆い尽くしており、実験的な試みはほとんど不可能に近い。規制によって開発を抑制しつつ、同時に都市にはない規制の緩さを有効に生かせるような、実験場としての「田舎」を探ることが求められているのであろう。

⑤近代における「田舎」への志向の源流と見られる遺構として海外での調査を行った。近代初頭につくられた郊外住宅、特にカントリー・コテージと呼べるような木造の表現を意識したハーフティンバーや、草葺きの一戸建に注目した。平成 23 年度には、イギリスにおいて、調査地はブレイズハムレット（ブリストル郊外）、レッド・ハウス（ロンドン郊外ベクスレイヒース）、レッチワース・ガーデンシティ、ベッドフォードパーク（ロンドン郊外）とした。平成 24 年度には、フランス、ベルギーにおいて、調査地はル・ヴェジネ、クロワジー・シュル・セヌ（ともにパリ郊外）、ワートルマール・ボワフォール、オーデルゲム（ともにブリュッセル）とした。以上は 19 世紀後半に開発された大都市郊外の、鉄道での移動を前提とした住宅地と、その流れを踏まえて 20 世紀初頭から 1920 年代にかけて、より計画的かつ大規模に開発された田園都市（ガーデン・シティ、シテ・ジャルダン）である。現在でもきわめて良好な住宅地環境が維持されている。

全体にこれらの住宅に見られる饒舌で物語性を含む建築表現は、18 世紀後半の啓蒙主義期に端を発し、19 世紀における近代化への否定的主張としての中世への憧憬と、その表現としてのゴシック・リヴァイヴァルの流れを汲むものと見られ、赤レンガ、妻面のハンマー・ビーム、自然木によるハーフティンバー、スレートや草葺きの屋根、彩色を施された寓意的なテラコッタ、スタンドグラス等に端的に表現されている。近代化と表裏のリヴァイヴァリズムは、上記③で触れた都市化と表裏の「田舎」への志向と、同位の関係と考えることができる。これらの表現は、近代化にあたりイギリス、フランスを範とした日本

における別荘や郊外住宅の姿にも、間接的に影響を与えていると考えられ、上記①の木村家住宅はその例といえる。さらに、童話等における「おとぎの家」やそれを現実化したテーマパークのようなイメージにも影響を与えていると考えられ、ある種のファンタジーや夢の形象化との関連が興味深い。合理的な近代都市から離れた「田舎」に、非合理的なフェアリー・テールを見る視線ともいえよう。一般に、近代都市計画史的な観点から論じられることの多かった郊外住宅地および田園都市ではあるが、個々の住宅の姿をデザイン論的な観点から見ることで、新たな意味付けを考えることができそうである。日本における「田舎家」の姿も、所有者や使用者の気分を転換させる物語空間であり、茶文化における道具立てにも通じる。しかし、この考察は定量化が難しく、いわばポエティックな領域での問題であり、この論理的展開は今後の課題としたい。

(4) 以上のように、当初の目的の(1)および(2)は計画どおりに達成され、(3)についても(1)および(2)の結論とも関連しつつ「田舎家」の位置付けができたと考え、近代における「田舎」への志向およびその系譜については、一類型としての「田舎家」を超え、さらに広範におよんだ。それぞれの観点から一定の成果を得たが、発表形態の制約もあり各論的なものにとどまっている。今後の課題として、より総合的な図書による全体像の提示を目指したい。

近代数寄者の別荘や、近代初期の郊外住宅の立地に見られるような、都市と相関関係にある「田舎」は、都市的な手段を享受しつつ自然を満喫できる理想的環境ではあるが、それを支えるためには都市居住以上のエネルギーと環境負荷を必要とする。この「田舎」の魅力と環境倫理上の背理の相関において、前者はあまりにも豊潤な文化を生み出しており、後者の是正のために前者を切り捨てられるほど事は単純ではない。その文化をどのように受け止め、未来へと受け継ぐかが、現代において課題となるべきことであろう。本研究はそのための文化史的資料を提供したことになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- ① 土屋和男、近代数寄者の茶会記録に見られる「田舎家」に関する記述、日本建築学会計画系論文集、査読有、第 78 巻 687 号、2013、1151-1160
- ② 土屋和男、茶室としての「田舎家」、常葉

学園大学共同研究「茶文化再考」研究成果報告書、査読無、2013、19-35

③ 土屋和男、益田鈍翁小田原別邸・掃雲台の土地、建物、景観の復元的考察 その 3、常葉学園大学研究紀要・教育学部、査読無、第 33 号、2013、311-335

④ 土屋和男、益田鈍翁小田原別邸・掃雲台の土地、建物、景観の復元的考察 その 2、常葉学園大学研究紀要・造形学部、査読無、第 10 号、2012、15-61

⑤ 土屋和男、『昭和茶道記』における茶会等の行われた場所と参会者、常葉学園大学研究紀要・外国語学部、査読無、第 27 号、2011、247-270

⑥ 土屋和男、「田舎家」の風景 多文化的状況を通して発見された民家の価値、常葉学園大学研究紀要・教育学部、査読無、第 30 号、2010、67-89

[学会発表] (計 3 件)

① 土屋和男、高橋箒庵の茶会記録に見られる仰木魯堂の初期作品に対する評価、日本建築学会大会学術講演会、2013 年 8 月 30 日、北海道大学

② 土屋和男、益田鈍翁小田原別邸・掃雲台における茶室等について 近代別荘における「田舎」への志向、日本建築学会大会学術講演会、2012 年 9 月 12 日、名古屋大学

③ 土屋和男、木村久寿弥太河津別邸について 近代別荘における「田舎」への志向、日本建築学会大会学術講演会、2011 年 8 月 23 日、早稲田大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土屋 和男 (TSUCHIYA KAZUO)
常葉学園大学・造形学部造形学科・准教授
研究者番号：60333259

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：